

# 撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

## 1985年 夏

曾根賢一が住む「あらふね」は山本盆地の南西部にあり、八月のこの時期、稲は出穂期を迎え、一年中で最も葉の色が濃い季節であった。

賢一が町の南西から北東に向かって流れる犬川で平沼茂を助けたのは、今から三十年前の稲穂が出始めた八月初めであった。

その日は、前日の夜に降った雨も上がり、刺すような日差しを真上から受けた田圃は、土中に溜めた水分を一気に蒸気として吐き出し、肌にまとわりつくような暑さだった。賢一は、幼馴染の平沼茂と遠藤功、井上昌二を誘い犬川に泳ぎに行った。F県の内陸部は海がなく、この地域の子供たちは、地元を流れる犬川や黒川で遊びながら泳ぎを覚えるのであった。四人とも泳ぎは上手い方で、メガネ型的水中メガネをかけ、潜りながらザリガニを捕ったりして遊んでいた。

泳ぎだして二時間は過ぎただろうか。泳ぎ疲れた賢一は、かたくち橋の橋げたに腰をかけ、仲間たちを眺めていた。功と昌二は川から上る仕草をしていた。

「功、昌二、そろそろ、上ろう」

賢一は勢いよく声をかけた。

「そうだな、賢一、上ろう」

功の声がした。

賢一は首を右左に回し茂を探した。ところが、茂はいない。不安になった賢一は、

「茂ちゃんが、いない」

と功に声をかけた。

功も賢一の声聞き川面を探るようにみたが、

「本当だ、茂がいらない」

と大きな声をあげた。

その時だった。賢一がすわっている橋下駄から10m位下流に急に茂が浮き上がってきた。賢一は一瞬ホッとした。と同時に、その川面に顔をだした茂の動きに違和感を覚え、

「茂、大丈夫か」

と大声をだした。

茂は賢一の声に一瞬反応し何か言おうとしたが、そのまま、下流にゆっくりと流され出した。

斜面上った功も、茂の不自然な動きに気が付き、

「茂ちゃん、茂ちゃん」

と大声を出し立ちあがった。

「茂がおかしいぞ」

賢一は橋げたから川に飛び込み茂を目指して泳ぎ出した。

「功、土手の向こうの田圃から稲を引っこ抜き、稲の束を作ってくれ」

と河原を走り出した功に向かい声をかけた。

功は大きくうなずくと、昌二と一緒に田圃に飛び込んで行った。

賢一は、犬川の川幅は5 mから6 mくらいで、深さは2 mくらいなのを知っていた。茂が溺れているのは岸から2 m位だったので、賢一が片方の手で茂の腕をつかみ、もう一方の手に稲わらをつかみ、その稲わらを功達が引っ張れば、茂を助けることができると考えたのである。

賢一は、功と昌二が引っっこ抜いてきた稲わらを確認すると、

「昌二、俺が顔を出したらその束を俺のほうに投げてくれ、功は俺のサポートを頼む」

と大声をあげ、茂の手前から潜り始めた。

賢一は、茂の背中に回り水の中で茂の腕をつかむや一気に水面に顔を出した。

その瞬間、左側に稲わらが見えたので左手で稲わらをつかんだ。

「昌二、引っ張れ」

賢一は必死で叫んだ。

茂の腕を掴んだ右手の感覚が異常なほど重い。稲わらを掴んだ左手はズルズルと滑りだしている。

「賢一、手を離すな」

昌二の声が聞こえた。賢一は「クソッ」と叫び、稲わらは死んでも離すものかと頭の中で叫んだ。

その時だった。茂を掴んでいる右手の感触と稲わらを掴んでいる左手の感触が微妙に軽くなった。賢一が引っ張り上げた茂の体を、功がしっかりと引っ張り川岸にいる昌二に向かって泳いでいた。功が気転を利かせて川に飛び込み、茂を引き上げていたのだ。

「助かった」

賢一はホッとした。このホッとした意識には、賢一自身も「溺れる」との恐怖が一瞬頭の中を駆け抜けたからでもあった。

ようやく岸についた茂は、功と昌二と賢一の3人がかりで岸に上げられた。

岸に引っ張りあげられた茂の意識は朦朧としていた。功が茂をうつむけに寝かせ、腹を持ち上げ大きくゆすった。

「ゴホッ、ゴフォ」

茂はむせび水を吐いた。

その行為を何回か行い、大量の水を吐かせてから、賢一は茂の両頬を平手でたたき、

「茂、茂」

と大きな声をかけた。

## 2013年春

北の盆地にも遅い春が訪れていた。

「ガッ、ガッ」と土をかき回すプラウの機械的な音が田圃に流れていた。代掻き用のアタッチメントを取り付けた80馬力のトラクターに乗った曾根賢一の姿が遠くに見えた。ヘッドホンを付けた賢一の耳からヒップホップの軽快なリズムが流れていた。

「やっと俺の時代が来た」

賢一の頭には、先月新聞発表された国の農業改革が鮮明に浮かんでいた。

『…農林水産省の奥野経営局長は、規制改革会議の農業改革と農協改革の答申を受け「規制改革会議の基本認識は、農業分野に競争原理が働くような環境を整え『農業を成長産業』と位置づけ、農地集積による法人経営を推進するために農協改革、農業委員会改革、農地法の見直しを実施する。関係機関である農業会議所、JA 全中、全農はこの規制改革会議の答申を踏まえ自主的に改革を実施してもらいたい」と述べた。この奥野案は官邸指導により作成されたものであり、自民党農林族もおお

むね了承したと思われる。この答申を受けて、農協組織は大幅な改革を迫られる…』

賢一は荒船郡西川町の十二代続く農家の長男だった。地元の高校を卒業すると東京のK大学に進学し経済学を専攻した。K大学で民間出身の竹園教授の指導を受けたことが賢一の人生を決定づけた。

「曾根くんは、荒船の大きな農家の後継者だってな」

「ハイ、そうです」

「卒業したら、荒船に戻り実家の農業を継ぐの？」

「ハイ、そのつもりです」

教授は一瞬困ったよう表情を浮かべ、

「私は反対だな」

と力強く言った。

「えッ」

賢一は教授の言っている意味がすぐには理解できなかったが思い切って、

「先生、家を継ぐなっていうことですか？」

「いや、卒業後すぐに継ぐなってことさ。曾根君も今のままの農業のやり方では儲かるとは思わないだろう」

「エーマア、難しいと思います」

「そう思うだろう。今の日本の農業は儲からない。農家の周りには農協がいて、その農協は、本来、農業指導に力をいれるところを金貸業に力をいれ、農業経営指導をやってないからだ。おまけに農協法の存在が市場原理・競争原理のジャマをしている。僕は、曾根君が卒業してすぐ家を継ぐのは反対だ。まず、食料関連の民間企業に就職し、人脈を作り、その後で田舎に帰り、君の経営を法人化し農地を集積し、農協を通さない経営を目指すべきだよ。今から十年後、二十年後には、日本農業も自由化を受け入れ関税が下がり、確実に変わる。農協法も変わる。その時

になって、初めて、日本の農業は、競争原理に基づく成長産業になりうるし、その時こそ、君なんかが中心となり日本農業を引っばっていくんだ」

教授は顔を真っ赤にして熱く語った。

賢一は大学四年になると教授のアドバイスに従い大手流通企業のリゾンに就職し、その会社の農業関連ビジネスの立ち上げに関わった。五年前の三十六歳の時に父親の急死により生まれ故郷の西川町に帰り、流通企業での農業ビジネスの立ち上げ経験を活かし、農業法人を立ち上げ大規模農業を目指していた。

つづく

## 小説紹介

### ルーラル小説 撤退田圃

稲田宗一郎

農業改革、農協改革が実行に移され、農地を集積し法人化した大規模稲作経営が、国政策通りに、日本の農業を支え、地域の中心になりうるのだろうか？

地域農協は本当に改革を実現できるのだろうか？

国の政策に従い、大規模化、法人化に向け突っ走った一人の青年の目を通し、農協の存在価値を問い直す。



# 撤回田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

三月のある日、JA で政府の農地中間管理機構の説明会があり、賢一も参加した。この事業は、政府が農家から農地を借り上げ、この借り上げた農地を農業への新規参入を考えている全国の法人に貸出し、積極的に大規模農業経営を推進しようというものであった。

JA 側は営農課長補佐の遠藤功と係長の井上昌二が新事業の説明役となり出席していた。

「賢一、お前の集落も機構の対象地域になったんだな」

隣に座った茂が話かけてきた。茂は東京の農業大学に進学し、卒業と同時に実家に就農し農業法人を経営していた。

「アー、ソウダ。俺の集落は機構の指定を受け、茂も知っている牧野のおっさんと村越のおっさんと何人かの爺ちゃんが貸手で手を挙げている」

「そうか、俺の集落も、佐藤のおっさんと小沢のおっさんが貸側で手

をあげ、俺が借り手で手を挙げている。F県は、貸し手と借り手がセットにならないと機構は受付けないみたいだな」

「どうも、そうみたいだ。ところで、茂、お前の地区では地域集積協力金はどうなっている」

「俺のところは、アグリ吉島と俺の所にくるみたいだ。お前のところは」

「俺のライスランド西川が引き受ける。集めた補助金は積極的な投資に使う予定さ。今度の政策で農地市場にもやっと競争原理が導入される。竹園教授が言っていた通りになってきた」

「竹園教授って、今回の農業改革を立案した産業競争力会議の竹園だろ。その竹園が賢一の大学時代の先生だったのか？」

茂は驚いように聞いた。

「そうさ、竹園教授は俺の先生だ。今回の農業改革は、まさに、先生の予想通りになった」

賢一は誇らしげに答え、

「このことは地元では誰も知らん。茂も秘密にしといてくれ」と続けた。

茂はこの話を聞いてやっと賢一の行動が理解できた。賢一が大手流通企業をやめ実家の農業を就いた時に、茂は農協青年部に賢一を誘ったことがあった。しかし、賢一は茂の誘いを断り、「俺は青年部には入らん」ときっぱり言い切り、一人で規模を拡大していった。また、たまに、二人で飲んだ時などに酩酊すると、「競争原理だとか」「市場原理だとか」訳の分からぬことを繰り返し、「俺は俺のやり方で西川農業を守る」、「お前ら農協派はなっとらん」とか毒づいていたのだ。しかし、農協主催の営農関連などの説明会があれば、賢一は必ず出席し、カメ虫防除用農薬散布や畔の草刈りなどの共同作業には集落の仲間と一緒に協力し惜しまなかった。



「わかった、詳しいことはこの説明会が終わったあと、一杯やりながら話そう。功と『喜楽』で一杯やることになっているから、賢一も来いよ」

「そうだな。久しぶりに皆で一杯やるか」

『喜楽』に集まったのは、賢一、茂、功、昌二と長老格の惣右衛門だった。店の名物である牛肉の切り落としの煮込みと鯨のベーコンを肴に農地集積の話になっていた。

「功、経営転換金の補助金について聞いてもいいか」

と茂が切りだした。

「転換金の何が知りたい？」

功が答えた。

「功のさっきの説明によると、この補助金は離農しなくても貰えるんだな」

「そうだ、離農しなくても OK だ」

「と言うことは、たとえば、俺は、法善寺地区で、転作でソバを55a作っているが、これをやめて、この土地を機構に貸し出せば、50万円の補助金がもらえるってことか」

「アー、そう言うことだ。多くの農家はこの転換金を目当てに捨てつくりの農地を機構に貸出すと思うよ。霞が関は、まったく現場と農家のことはわかってないからな」

功は困ったような調子で言った。

「霞が関の人間は都会の人間と農村の人間は同じ金の原理で動くと思っている」

と続け、

「そうさ、やつらは農家のしたたかさを全くわかっていない」

と茂も続けた。

功も茂も、農村の人間は都会の人間よりも「金に細かく」、補助金があればその補助金を貰うべく、あらゆる知恵を働かせ、見栄も何も考えずひたすら自分のふところを優先させる気質を持っていることを知っていた。

「本当だよな。霞が関と永田町の連中ときたら、農業の現場の話なんてほとんど理解していない」

今までひと言も喋っていなかった昌二が珍しくやや強い口調で言った。

「この前、農協青年部が推薦している舟木代議士と話したら、霞が関に入る情報は、現場を知ったような顔をしている一部の学者や利益誘導者からだと言っていた」

「本当か？ 舟木議員はそんなことを言っていたか？」

「ああ、この前、舟木議員と会ったときに聞いた話だ。おまけに、マスコミもやつらの仲間でやつらに都合の良い記事を載せるって言っていた」

「舟木議員がね……………」

「そう言えば、東都経済産業新聞は、『攻めの農業政策』に協力的でアンチ農協の農業法人の記事なんかは積極的に取り上げるのに、農協についてほとんど批判的な記事ばかり書いているからな」

「……………」

茂、功、昌二の表情が、一瞬、暗くなったようだった。

「お前らアホか、お前らは国のやることに対していつも否定的な考えをする」

賢一が少し顔を赤らめて言った。

「否定的な考え？ それって何だよ」

茂が即座に反応した。

「そうだな……」

賢一は少し考え、

「たとえば、国がやろうとしている農協改革を考えてみろ。農協は本当に改革ができると思うか？ 功、お前、どう思う？」

「たぶん、農協だけでは改革は無理かもな。改革どころか、多くの役員や職員は農協が危機だって言う意識が全くないからな」

「それ、みろ、俺の言ったとおりじゃないか」

「確かにな。俺からみても農協職員は融通が利かないって言うか、能力がないのか、問題の本質が見えずに、ただ、目先のことだけをみているな」

功は昌二を見ながら言った。昌二も頷きながら、

「確かに功の言う事は正しいと思う。俺は、コメの生産指導が担当だけど、この前、上層部に IT を活用した新しい営農指導案を提案したら、『井上、農協の営農指導は組合員と顔をあわせ良く話合うことだからな。お前の言っている IT を活用した圃場管理なんて上手く行くはずはないよ。もっと、組合員を見ろ』だってさ」

と両手でお手上げのような仕草をしながら言った。

「昌二、お前の指摘は正しいよ」

茂がサポートした。

茂は、青年部の連中は IT とかタブレットとかの新しい技術に興味をもっており、これらの技術を活用しようとしていることを知っていた。

「そうでしょ、茂ちゃん。なのに、部長を始め担当常務なんかは、『井上の提案は、今までやったことがないから危険がありすぎる。そんな案には予算は組めない』って、俺の提案は却下よ」

「そうだろ、昌二、お前ら農協は考えが古い。既得利権に胡坐をかいているだけだ。だから、規模が大きい農家は農協から離れていくのさ」

賢一はコップの底に残っている酒を一気に飲み干した。

「でもな、農協が全て悪いわけじゃないよ。そのくらいは、賢一だってわかっているだろう」

功は黙ってグラスに口につけた。

「いや俺だって農協が全て悪いと思っていないさ。俺が言いたいのは、マスコミの言っていることもある意味正しいってことさ」

「どういうことだ？」

「事実として日本の稲作農業が規模拡大していないのは、従来の農業に対する考え方が古く、規制改革が必要だって点さ。だから農業所得が増えないのさ」

賢一は確信した口調になった。

功と賢一の話が大きく頷きながら聞いていた茂は、皮肉を込めた口調で話を引き取った。

「賢一の言うことも少しは理解できるさ、でもな、賢一、昔から国の言うことを聞いていたら良いことはなかったじゃないか」

「確かに、茂の言うとおりの、今まで、その傾向があったことは俺も認める」

「そうだろ、政府の政策がコロコロ変わりすぎている。最近だって、個別所得補償だろ。今回の機構事業だって前の農地集積円滑化事業と基本的には変わっていないよ」

「要するに政策の一貫性がないってことを言いたいんだろ、茂」

「そうさ、これじゃ、一番困るのは我々農家だよ」

茂は大きく頷きながら続けた。

「たとえば、政府がコメの価格を12,000円で10年間固定する政策をやってくれたら、俺だって、機構の制度を積極的に利用し、政府が言う『攻めの農業』のための経営戦略を立てることはできるさ」

「確かにそうだ、でもな、茂、今回の農業改革は、おそらく、ぶれなはずだ」

「どうして、そう言える？」

「政策の基本が市場原理と規制改革だからだ。この基本は、今後変わらない。いや、日本はそうならないと国際社会で生きていけないからだ」

「しかし、俺は、国の言う事は信じない。今回の政策には必ず裏がある。地域の農業は地域に暮らしている俺たちが守るしかないんだ。都会の人間がなぜ地域を守る責任と義務がある？」

茂は同意を求めるように、

「なあ」

と功の肩を叩き、

「都会の人間が地域を守ることなんてあるはずないじゃないか。だから、俺は功と昌二と一緒に農協を改革し地域の農業を支える。地域の農業がなくなれば農協もなくなるのだから俺と農協の利害は一致するからな」と続けた。

「わかったよ、茂、お前はそれでやれよ。俺は補助金も含め国を徹底的に利用し自分の経営を守る。功には悪いけど、売先も農協ではなくロイズやリゾンなどと組む」

賢一は自らを鼓舞するように力強く言った。賢一がこう言い切ったのには理由があった。ロイズファームから共同出資の話が来ていたからである。ロイズファームはP県名島市の4haの耕作放棄地を機構を通し借りることになっていた。しかし、地主が75歳の高齢農家で、設立する農業法人の役員にはなれるものの、実質的な経営はできなかった。ロイズファームはツテを使い賢一に接近し、共同出資で農業法人を立ち上げないかと誘ってきたのである。1,000万円の出資金は折半でということであった。賢一はこの話に前向きだったのである。

つづく

# 撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

突然、惣右衛門の険しい声が聞こえた。

「国は、農協や農地法の見直しで、何とか農地を法人に集めたいと考えているようだが、おそらくそれは難しい。特に平場の地力が良い田圃は地域内の担い手が借りることになる。機構に貸し出される農地は、借り手が見つからない条件が悪い土地が多くなるさ。これはコメを作っている百姓の常識さ」

惣右衛門はかなり酔いながら、

「大体、百姓は国のため、人のためになんて考える人種じゃないよ。耕作をやめて補助金がもらえるなら、さっき茂が言ったように捨てつくりの農地を機構に貸し出し、補助金をもらうってことになるのさ。百姓だってバカじゃないよ。良い田圃、作り易い田圃は自分でわかっているんだ。だから、良い田んぼには無理してでも自分がコメを植えるさ、人に貸し出す田圃なんてろくでもない田圃さ。大体、田圃と一口に言って



も、同じ肥料を同じ量撒いたって、田圃が違えば、いや、風向きや取水口が違えば、収量や食味が違うのがあたり前さ。女と同じさ」

と続けた。

「女と同じ？ 惣右衛門さんはそっちの道も篤農家で、しっかり耕したのか」

茂は冷やかし半分で言った。

「女は別さ、田圃みたいには上手くいかないさ。俺のかかあを見ろよ」

惣右衛門は照れ隠しに笑い、

「ところで」

と話題を農協に変えながら、

「農協はさっきお前が言っていたように相変わらずだな。職員も役員も、都会のサラリーマンと同じで、クビになり失業するのが怖いもんだから、組合員や地域を見ないで、上司の顔色を見て、リスクがある新しいやり方にはチャレンジせず、昔のやり方しかしないからな」

と続けた。

「そうだよ。農協がそんな考えだから農業はダメなんだ」

茂も頷いた。

「確かにな、農協には皆が言うような体質はあるな。この前の役員改選でも改革派の和田専務が足を引張られ再選されずにクビになり、保守派の運動論の内野常務が専務昇格だったしな。俺だって、先はわからないさ。クビになったら、賢一、俺を雇ってくれよ」

功は笑いながら賢一を見た。

「そんな時は幼馴染の特権で雇ってやるか」

賢一は軽く答えた。

「そうか、賢一、頼むよ」

「俺は、今、西川を中心に40haやっているが、将来は機構を使って100ha、200haと規模を拡大するつもりだ。そうなると、吉島や西川の

土地だけでは無理だ。お前らがどう思おうと、俺は、今回の事業を積極的に利用し、地域を超え、場合によっては他県にまで農地を借り、規模拡大をするつもりだ」

「賢一の考えは、まさに今の政策にピッタリだな。そうなりゃ、俺も少しは癪だけど、お前の法人を評価しなければな」

「当たり前だ、前にも言ったけど、今の農業で競争力をつけるには、規模拡大、これっかないよ」

「そうかも知れんな。賢一は賢一のやり方で頑張れよ」

茂は賢一にこのように言ったものの、茂自身は、賢一とは全く違った考えだった。茂はコメ専業で規模拡大したとしても、米価が10,000円を割り込み、8,000円程度になれば、経営はなりたたないと考えていた。100ha、200ha も経営するとなれば、人を雇い人件費を払わなければならない。人件費を150万程度の低賃金に抑えられれば経営としては可能性はあるが、そんな安い賃金では若い人は働くはずがないと考えていた。

さらに、水の管理とか畦管理などの日常の管理は誰がやるのか、コメ作り特有の問題もあった。

茂の家も、賢一ほどには古くはないが、それでも茂で七代目であった。茂は、コメと麦の専業で農地を集積し、大規模稲作経営を実現できても、TPP で外国から安いコメが入り、米価が大幅に下落すれば、100ha 程度の経営は一たまりもないと考えていた。

茂のコメ作りの師匠は惣右衛門だった。惣右衛門は5haの田圃でコメを作っているが、5haのうち、犬川沿いの2haの田圃で生産する「姫こまち」は「惣右衛門のコメ」のブランドで高く売れていた。

惣右衛門のコメ作りの哲学はいたってシンプルであった。

……俺はコメのことしか知らん。世の中の流れが変わり、流行が変化しているなんて知らん。確かに俺のコメは高く売れている。しかし、俺

はコメを高く売ることを目的としたコメ作りをしたことは一度もない。俺は、ただ、親から教えられ、怒られながら、高校を出てから、ただ、ひたすらコメを作ってきただけだ。飯をくうために、家族を養うために俺にはコメ作りしかなかった。俺は特別すばらしいことをやってきた訳ではない。俺のコメが高く売れるのは俺が仕組んだわけではない。俺は、ただコメ作りが好きだけで、美味しいコメ、嘘のないコメを作りたいただだけだ。俺は自分の好きなことをやってきただけだ。世の中の評価なんて関係がない。

良く考えてみろ、世間の評判ばかり気にしていたら、周りの人間に媚びを売り、自分を売り込むだけの品のない人間に成り下がるだけだ。俺はそんな人生なんてごめんだ。俺が育てるコメだって同じだ、育てた俺が品のない人間なら、育ったコメにも品格はないんだ。俺がコメに対して、お前を高く売ってやると思った瞬間、そのコメは俺にソッポを向くんだ。コメが高く売れるとか、人気がでるとかは作っている俺からみればまったく関係がないことなんだ。

つまりな、人間なんてやつは、自分が世の中で認められれば、成功した人生ってことらしいが、そんな考えは俺にはこれっぽちもない。そんな世の中の評価なんてくそくらえだ。一番重要なことは、自分は自分でしかありえないってことを真摯に受け入れることなんだ……

茂は、この「惣右衛門のコメ」を地域に広めようとしていた。

具体的には、惣右衛門の「職人技術・肥培管理技術」を「IT 技術」を活用して圃場毎に管理することを、地域の担い手農家に普及しようと考えていたのである。功も昌二も茂の考えに賛同し、農協青年部の担い手を中心に、古い農協体質の役員たちと戦っていたのである。

——この話は賢一には言っていなかった。

「茂、お前はいつも悲観的に物事を考える癖がある、それは、お前の考えが古く、お前がアホだからだ」

賢一は、酒の勢いに任せ挑発的に言ってきた。

「俺の考えが古い。どこがアホなんだ？」

茂は、机をドンと叩きながらくっつかかった。

「お前が古いのは、今の主流である市場原理、新自由主義を全く理解していない上に、日本を中心に農業を考えていることだ」

「日本を中心に農業を考えて何が悪い？」

「茂、良く聞けよ、今は、ヒト、モノ、カネの自由化が人類の幸福につながるんだよ。近い将来、日本は、確実に、外国から安い農業労働力を入れる政策をとる。そうなれば、相対的に安い賃金で農業経営ができるようになる」

賢一は茂を見下ろすように言った。二人の間に微妙な沈黙が流れた。

「……………」

すると、今まで静かに聞いていた惣右衛門が、茂と賢一の議論に口をはさんだ。

「賢一、俺はそうは思わん。人間が住んでいる社会は理屈通りには動かないんだ。コメ作りだってそう。米価が下がっても、爺さんたちはコメを作っているじゃないか。賢一に土地を貸してくれた村越や牧野のじっちゃん、病気で体が動かなくなったから賢一に貸したんだ。大部分のじっちゃん達は、東京に住む息子や孫や親せきにコメを送ってやるために、体が動く限りコメを作っているんだ。「あらふね」のコメ農家は、コメに妙な愛着をもっているんだ。奴らのコメ作りは理屈じゃないんだよ」

「確かに惣右衛門さんの言うように、今の親父たちの代はそのとおりだよ。でもな、次の世代はどうなんだ。やつらは明らかに土地に対する愛着も親の代に比べて薄いし、コメ作りについてもほとんど知らん。こ

ういう連中は、農協も利用しないし、近い将来農地を貸出しはずだ。こんな状況でどんな農業ビジョンがあると言うんだ。農地を集積し、規模拡大しかないじゃないか？」

賢一は声を荒らげた。

「要するに、賢一は、古い奴らは黙って農業から去り、黙って土地を貸せって言いたいんだな」

今度は、茂が力んで言った。

「まあな、単純に言えばその通りさ。経営能力がある人間がコメを大規模に作り、老人や後継者がいない農家は、グズグズ言わずに、俺みたいな法人に農地を貸せばいいんだ。惣右衛門さんだって、息子の惣次郎は後を継がず、東京に就職してしまったじゃないか。惣次郎は西川には戻ってこないさ。そうなりゃ、惣右衛門さんの家は終わりだし、田んぼを貸すしかないんじゃないか」

賢一は酔った勢いで言い放った。

不意に茂が立ち上がり賢一に向かって指をさし、

「賢一、それは、言い過ぎだぞ。惣右衛門さんに謝れ！」

と叫んだ。

テーブルを挟んだ賢一と茂の空間だけが切り離され、黄色いライトの中に浮かんでいた。

「……………」

惣右衛門は手でマアマアと言う形を作り、賢一と茂をなだめるように静かに言った。

「茂、まあ、いいから、いいから。賢一くらいの元気がないと、西川のコメもダメかもな」

つづく

# 撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

時事・小説

## 2015年 春

「賢一さん電話です」

美紀は、ちょっと首をかしげてこちらを向いて言った。

「誰からだ？」

「東都経済産業新聞の高田という方ですが、つながりますか？」

「東都経済産業新聞？ うん、つないでくれ」

賢一は一瞬考える表情を浮かべたが、

「曾根ですが、要件はなんでしょうか？」

と気持ちを整理するように言った。

「私、東都経済産業新聞の高田というものですが、実は、先日、東都テレビで放送されたコメの特集番組で、曾根社長がロイズファームと共同出資し、政府の農地中間管理機構を活用した大規模稲作農業を展開し



ている報道を見たものですから、お時間があれば、曾根さんの経営を取  
材したいと考えていますが、可能でしょうか？」

「東都テレビ、アッー、先週放映されたやつですね」

と少し間をおいてから、

「わかりました。取材をお受けします」

と丁寧に応えた。

賢一の前には今年に入ってから、雑誌、テレビ等の取材と講演依頼が  
増えていた。

「ところで、具体的にどんな事をお聞きになりたいのですか？」

「まず、現在、政府が推し進めている『攻めの農業政策』に対する現  
場からの率直な意見、規模拡大の経緯と経営内容、それと、将来の日本  
農業の進むべき方向などです」

「わかりました。要するに、現在の農業政策を有効に活用し、政府の『攻  
めの農業』を実践している法人経営の例として我が社を取材したいと言  
うことですね」

「ハイ、わかりやすく言えばその通りです。それとロイズファームと  
共同出資したライスランド名島の設立経緯についてもお聞きできればと  
思っています」

「わかりました、いつ頃が都合がよいのですか？」

「できれば、今、弊紙が朝刊の一面で連載している『農業改革への挑戦』  
に取り上げたいと考えているので、今週末あたりにお問い合わせのいた  
いますか？」

「今週末ですか？ わかりました、では、恐縮ですが、金曜日の15時  
に名島市の弊社の事務所でお願ひします。時間は2時間程度でかまいま  
せんね」

「ハイ、よろしくお願いします」

「ハイ、こちらこそ、よろしく」

賢一は丁寧に礼を言って電話を切り事務所をでた。

ひと雨来そうな黒い雲が朝日岳の方向に広がっていた。

賢一は、ポケットからタバコを取り出しライターで火をつけ、大きく空中に煙を吐いた。煙は賢一の右斜め上でスーとまとまり空中に漂っていたが、徐々に形が崩れ消えて行った。

金曜日の15時少し前に東都経済産業新聞の高田が事務所に取材に来た。

「曾根社長、まず、貴社の経営概要についてお聞かせください」

「ここに簡単なパンフレットあるのでこれを参考に説明します」

賢一は高田記者にパンフを渡した。

「ハイ、よろしくお願いします」

「まずは経営面積ですが、本社のライスランド西川は、全部で65ha、そのうちの62haにコメを作付しています。コメは主食用、加工用、今年から飼料米を作付しています。品種は姫こまち、はえぬき、ひとめばれ、あきたこまち、コシヒカリ、べこあおば、それともち米の出羽きりなどです。主食用が70%、加工用が20%、飼料米が10%といったところ。今後、政府が推奨している飼料米を拡大しようと思っています」

高田は頷きながら、

「飼料米を増やす理由は何ですか？」

と聞いてきた。

「補助金も含め10aあたり10万円と高いことです」

「そうですか？ 主食用米の価格はいくらぐらいなのですか？」

高田はなんの遠慮もなく聞いてきた。

賢一は少し表情を変えて、

「品種や栽培方法にもよりますが、1俵あたり13,500円くらいかな」

「販売先はどこですか？」

「売先はいろいろです。業務用もあれば、直接スーパーにも販売して

いるし、農協にも売っています」

「農協にも売っているのですか？」

高田は、やや驚いた表情で聞いてきた。

「ハイ、あらふね農協は全農ルートの他に農協が独自ルートでスーパーに直販しているのでリスク分散もかねて販売しています」

「それ以外のルートは？」

「それ以外は、少しでも有利販売につなげるために、個人で特別栽培米農産物認証をとり、ライスセンター、精米工場も自前で所有し、乾燥、精米してリゾンなどのスーパーに直接販売しています」

「リゾンにも直接販売しているんですね。今後は、農協を通さない販売チャンネルが増えると考えてよいですか？」

「おそらく、今後、コメはだぶつくと思うので、ロイズなどのおにぎりを含め販売先を増やそうと考えています」

「ロイズですか。だからロイズファームと共同出資してライスランド名島を設立したのですね」

「そうです。今は、P県では4haのコメを生産してロイズに販売していますが、将来的には、TPPで輸入米が85万t程度に増加して米価が下落することを想定し、4、5年後の2020年以降はP県で野菜の生産を開始しようと考えています」

「なるほど、今後を考えれば、コメだけではなく、野菜も生産し、大型の量販店やコンビニとの直接取引拡大を目指すと言う事ですね」

「マア。そんな感じですね」

高田は、自分の思惑通りに賢一が答えたのに満足し、次の質問に移っていった。

「曽根社長、現在の経営での問題点がありましたら教えてください」

「そうですね、一つは労働力の問題、もう一つは、ライスランド名島で経験した他県での借地農地です」

「もう少し具体的にお願いします」

「わかりました。最初の労働力の問題ですが、現在米価は13,500円程度ですが、将来、米価はもっと下がると考えています。そうすると、日本人労働者の賃金ベースでは経営が難しくなってきます。この対応をどうするかが一つの課題です」

「それについては、今でも外国人労働者は雇用できるのでありませんか？」

「今の制度でも技術研修生という形ならできますが、正式に農業労働者としての雇用になるとダメです。今、農業に雇用されている外国人労働者は潜りですよ」

「つまり、制度自体が灰色ってことですね、曾根さんとしては、国が大規模農業を実現したいのなら、外国人労働者に農業労働市場を開放して欲しいってことですね」

「そうです、できれば、国に早急な法整備をお願いしたいところです」

高田も同じ意見だと見えて大きく頷き、

「この件はしっかりと記事に書き込みます」

と続け、

「他県での借地の件は？」

と聞いてきた。

「実は、高田さんもお存じのように、昨年、P県でロイズファームと共同出資型の農業生産法人を作り、4haの農地を借りコメを生産・販売しています。3年以内に15haくらいまで農地を集積したいと考えています。ところが、地元でないP県で農地を借りるとなると大変なのです」

「どうしてですか？ 国は、確か、全国農地ナビを構築し、インターネットを介して農地情報を全国に配信し、法人の農地集積を支援しているのではないですか？」

高田は自信を持って答えた。

「確かに、全国農地ナビはありますが、利用してみるとナビには借地候補が少ないのです」

「借地候補が少ない？」

「そうです、多くの県では借手と貸手がセットでないと機構では扱わないので、ナビには案件が少ないのです。おまけに、国は、農地中間管理機構への農地集積が進まないものだから、一度、却下した従来の円滑化事業からの付替えを認め、J県のある法人は、書類の書き換えで、二億の農地集積金と経営転換金を受け取ったようです」

「そんなことがあるのですか？ 税金の無駄使いじゃありませんか？」

「そうなりますね。国は、面子にかけても、農地中間管理事業を実現させるために必死なっています」

高田の目が一瞬動いた。

賢一はその変化に気が付き、

「高田さん、農地ナビ、中間管理事業に興味がおありなら、現場に詳しい役場と農協の友人を紹介しますよ」

と付け加えた。

「ありがとうございます。この取材が終わったらお願いします。農地ナビや農地中間管理機構が曾根さんの指摘のようだと、法人の全国規模の農地集積は難しくなりますね。また、同時に、中間管理事業が当初の目的を達成していないとなると、また、税金の無駄使いになりますね」

「そうです。他県での農地集積は地元と比べてコストもかかり経営上のリスクも高くなりますからね。また、農地中間管理事業自体が、家族経営が中心の稲作農家の心理とマッチしていないのかもしれません。困ったものです」

「なるほど……」

高田は数回ほど頷きながら腕を組み考えていたが、思いついたように、  
「そうだ、曾根さん、農協組織が他県での農地集積を斡旋すればよい

のではないですか？」

と、突然、大きな声をだした。

「それは、難しいですね。農協は地域の農業は地域で守るのが基本ですから」

「それは農協のエゴでしょ、曲がりなりにも全国組織、県組織があるのですから、国の政策に協力すべきですよ。それをやらない農協組織は、世論や政府から金融・共済の農協と思われ、5年後にまた改革を迫られますよ」

賢一は高田の指摘はもっともだと思った。

「残念ながら、高田さんが指摘したようにはならないでしょう。農協組織はあなたが思っている以上に古いのですよ」

「そうでしょうね、そこが問題ですね。いろいろありがとうございました。今回の取材を踏まえ、最後は、古い農協体質ってどこでまとめたと思いますか、そんな方向で良いですか？」

高田は冷めたコーヒーを飲みながら言った。

「はい、その方向でお願いします」

賢一はこう言ってしまってから妙な後ろめたさを感じていた。

「最後ですが、国は、TPPを受け入れた訳ですから、国はその対策費から、飼料米への補助金を少なくとも10年、いや5年程度は続けて欲しいとの強い要望があったと記事にしてください」

つづく



# 撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

## 2020年 春

「買い取り価格が1俵8,500円では安すぎます。何とか10,000円、いや9,500円に引き上げてくれませんか？」

賢一は大崎にあるロイズ本社にいた。

「曽根さん、それは無理だよ。あんたも、コメの価格が下落したのを知っているだろ。8,500円が精いっぱいだ」

ロイズのコメ仕入れ担当の酒井が冷たく言った。

コメの価格は2015年の TPP の合意と2018年の生産調整の廃止以降急激に下落した。2015年の TPP の合意を受け、アメリカからの輸入米は、ミニマムアクセス米を含め2020年には85万tに達していた。さらに、2020年に、政府は財源不足を理由に今まで奨励していた飼料米の補助金を削減し、農家の手取り価格は5万円程度まで下がっていた。

「8,500円なんて到底受け入れられませんよ。これじゃ採算割れですよ」

賢一は、2014年からP県名島市の農地を機構から借入し、ロイズファームと共同出資して農業生産法人ライスランド名島を経営していた。

「曽根社長、あんたの持っているP県のコシヒカリの相場が幾らか知っているのですか？ 8,000円だよ、8,000円。こっちは500円高く買おうって言っているのですよ。魚沼のコシヒカリだって14,000円がやっとの時代ですよ」

「そんなのわかっていますよ。それでは、うちの姫こまちを去年の11,000円から10,500円に値引きするから、P県のコシヒカリは9,500円で引き取って下さい」

「無理だね、うちが共同出資している農業法人は全国にいくつもある。ある法人は1,000ha規模の大規模法人だ。そこの法人ではコシヒカリを8,500円を出してくれるそうだ。ライスランド名島のコシヒカリが9,500円なんてありえないね」

「交渉の余地はないのですか」

「ない、まったくない、8,500円を飲んでくれなければ、君の所からコメを買わない」

酒井は表情を変えずに事務的に言い切った。

価格設定は本社の担当役員からの指示であり、酒井は単なる使いっばしりで、交渉権は与えられていなかった。

「他の代替案はないのですか？ 8,500円じゃコメ生産を続けられませんか」

「それは、君の経営手腕がないからで我が社には関係がないことだ。コメの相場が下落することは君だって予測できたはずだ。その対策を講じなかったのは君の経営責任だよ」

酒井は賢一の目を真っ直ぐに見て、冷めた表情で本社役員から言われ

てきた文言を言った。

「ビジネス的には、わが社は、君の農業法人に40%出資しているだけで、君の法人から全量コメを買う単年度契約をただけだ。契約書にもあるように購入価格は毎年相談となっている」

酒井は何の感情も示さずに事務的に続けた。

「こちらの調べではライスランド名島の累積赤字は4,000万円程度ある。今後、米価が上がるとは考えにくい。曾根さん、ここで、ライスランド名島は閉めて、あなたは、地元の農業法人経営に専念してはどうだろうか。わが社は、赤字を含めライスランドの経営を引き受ける。もちろん、ただじゃない。あなたの出資金600万円を300万で買い取る。償却が終わった農業機械を売却したところで赤字を補てんできる金額で売れるわけではないし、君の実質的損失は300万で済む。悪い話ではないと思うけどな」

「……………」

賢一のまわりには酒井の声だけが流れていた。

「エッ、ライスランド名島をロイズファームに譲る？ 賢一、本気か？」

宮島は驚いて聞き返した。宮島は賢一のリゾン同期入社組の一人では取締役になっていた。

「ロイズはライスランドを4,000万の赤字を含め300万で買い取ってくれる。300万は俺の出資金の半値だ」

「お前は、その話を受け入れたのか？」

「アー、先週契約した。だから、お前に報告にきたんだ。お前には俺の「あらふね」のコメをリゾンに販売したときに世話になったからな」

「ライスランド名島を手放す以外に方法はなかったのか？」

「米価が8,500円を割ったらどうやっても無理だね。特に俺のような100ha程度の規模の法人ではね。米価下落が俺の予想より3年早かった。国の政策も腰砕けだし、相変わらず70歳を超えた団塊の世代が帰農し、孫向け、健康のためにコスト割れ覚悟でコメを作っているからな」

賢一は戸惑った様子で言った。

「確かにな、お前のところもそうか、実は、俺のところのリゾンアグリの直営農場も目標の5,000haには全く届かずやっとなら2,000haだ」

「リゾンアグリもそんなもんか」

宮島は少し考え、声をやや低くして賢一の耳元で囁いた。

「賢一、でも少し変なんだ。経営陣はそんなに深刻じゃないんだ」

「……………」

「俺も知らなかったのだが、2013年から始まった産業競争力会議の農業改革には、政府と大手企業との間に暗黙の了承があったらしい」

と宮島は話だした。

## 宮島の話

——規制改革会議の農業・農協改革は、大手商社、大手不動産会社、大手都市銀行と連携して推進してきたらしい。これらの大企業は農業分野に競争原理を導入することを「錦の御旗」として政府に働きかけ、大企業にメリットのある政策を打ち出してもらったらしい。規制改革会議の初代農業部会議長がロイズの浪川だったことを思い出せばいい。浪川を推薦したのは彼の出身母体の三東商事だ。

大企業グループは2000年に入ってから徐々に農水省に近づき、01年に農協法の一部を修正させ、農業政策の対象を兼業農家を含む単なる農家から担い手などの大規模農家に集中させた。もちろん、我が社もその動

きを敏感に察知し、そのころから農業分野への参入を検討し始めたらしい。セヴン・ナインにしてもロイズにしてもしかりだ。もともと、彼らは、日本の農業なんてどうでもいいんだ、ただ、安い農産物を仕入れたいのだ。そのために、自社がより儲かるサプライチェーンを作るのが目的で、目の上のたんこぶで企業努力もせずに90兆円も金を集めている農協を潰すことが狙いなのだ。

さらに、彼らがしたたかなのは、最終的な狙いは農地ってことさ。耕作放棄地に課税することにより農地を土地市場に吐き出させ、農地法改正で農地を所有できる法人の名前を「農業生産法人」から「農地所有適格化法人」に変更したことからもわかるように、大手企業グループは農地売買も可能にしたのだ。

賢一のライスランド名島だって、もとは農家の耕作放棄地だろ。うちのリゾニアグリだってほとんどが耕作放棄地だ。農地法改正で農地売買や農地転用が緩くなり、耕作放棄地に集配センターや野菜工場の建設が可能になったのを見れば、彼らの狙いはほぼ達成したと考えられる。工場や集配センターが建設されれば周りの地価は上がる、さらに、立地条件が良ければ、農地転用条件も緩くなっているから、転用から売買への土地ころがしも可能になる。彼らの狙いはここなんだ。

ロイズが賢一のP県の法人を赤字込み300万円で買うと言ったのは、決して善意ではなく、ビジネスからみて投資と判断したからだ。

「宮島、そんなことがあったのか？」

田舎暮らしの賢一には宮島の話は企業小説のように聞こえた。

「アッ、俺も驚いたよ。ところで、賢一の名島市の農場は何haあるんだ？」

「18haだ」

「場所は常総自動車道の名島インターの近くじゃないか？」

「車で10分くらいの少し北側のところだ。2011年の原発事故の後、P県産農産物は風評被害で価格が下落し、コメも買い叩かれた。そのあと貸し手の農家はコメ作りをやめ2014年から俺がロイズと一緒に機構を通して借りたんだ」

「インターから10分な。やっぱりな」

宮島は頷きながら

「ところで、ライスランド名島の役員にはお前とロイズファームの他に誰がいる？」

と聞いてきた。

「2名いる。そのうち1人の役員が農作業に従事している。地元の元農家だけだな………」

「そうか、やっぱりな。ロイズさんはしたたかだ。農地法の改正で、農地を所有できる法人の要件、具体的には、役員のうち1人以上が農作業に従事すればよい事になったことを利用したんだ」

宮島はそういう情報に詳しかった。

「どう言うことだ？」

「いいか、賢一、ロイズはライスランド名島を通して地主から18haの農地を購入し、その農地に、コメ、麦、キャベツ、イモなどを作り、それぞれを4ha以下の「農地所有適格化法人」に分社化する。その後、時期を見て、それぞれの法人が農地転用を申請するはずだ。農地転用制度の変更で4ha以下の農地転用申請が緩和されたからだ。農地転用が許可されれば、集配センターや野菜工場の建設も可能だし、場合によっては、これらの用地として転売すればよい、ロイズは利益がでるはずだよ」

「しかし、国はなぜそういうことを黙認するんだ？」

「国は市場経済を徹底したがつている。徹底したいと言うよりも市場経済を導入しなければ日本は世界の中で生き残れないと信じているから



だよ。この動きは、いまに始まったわけではなく、小泉政権あたりから強くなり、安倍政権でその路線が確定したんだよ」

「……………」

宮島の冷静な声が続いた。

「賢一、お前だって今の農業政策に賛同したから法人経営で規模拡大に突っ走ってきたんじゃないのか？」

宮島の言うとおりであった。賢一は国の政策を活用して規模を拡大してきたのだった。しかし、宮島が指摘したような農地の転売など全く考えなかった。ただ、コメのコストを下げるために、国の言うとおりでひたすら農地を集積してきたのである。言いかえれば、日本のコメ生産を守りたかったのであり、それが、「あらふね」で13代目の農家の跡取りとして生まれた宿命だと信じていたのである。

「宮島、どうやら、時代は、俺が知らんうちに大きく変わってしまったらしいな」

「そうみたいだ、国の中枢部と大手企業が組み、国益と言うスローガンのもとに、自分たちの都合のよい政策を作り上げる構造ができたようだな。俺も、今回のお前の件で、今後、自分がリゾンの中でどう生きていくのか、しっかり考えてみるよ」

つづく

# 撤退田圃

いなだそういちろう

稲田宗一郎

## 2020年夏

小松のカントリーの前の道を東へ向かって走っていた時に、茂は不意に、

——賢一に惣右衛門さんの息子に会ってもらいたい。  
と思った。

惣右衛門の家は高山地区にある。惣右衛門の息子は田んぼで作業しているかもしれない。惣右衛門の息子の惣次郎は二年前に東京の仕事を辞め、親父の跡を継いでコメを作っていた。

「賢一、この道を曲がるぞ」

茂がそう言うと賢一は怪訝な顔をした。

「そっちは、JA 本店へ遠回りになる」

「まあ、いいじゃないか。賢一はまだ知らんが、惣右衛門さんの息子

が帰ってきてコメを作っている」

「えっ、惣次郎が戻っている？」

賢一は驚いて、

「惣次郎は東京の IT 会社に勤めていたんじゃないのか？」

と言った。

「東京でいろいろあったらしい。惣右衛門さんと惣次郎は昔から家を継ぐ、継がないで大喧嘩をしたことは賢一も知っているだろ」

「そんな事があったな」

「ところが、家に戻り惣次郎がコメを作りたいと惣右衛門さんに言ったらしい。惣右衛門さんは最初はまったく無視していたが、親子なんてわからんもんだ。結局は受け入れて、今じゃ、惣次郎は立派な農業後継者さ」

「コメ作りが親子の関係を修復させたのかな？」

二人を乗せた車は八幡地区の農道をゆっくり走っている。昼下りの田んぼの中の道は、ただ、道だけが存在し、その道を夏の暑い日差しが照らしているだけだった。

何本かの農道を曲がり惣右衛門の家の前の道に来た時、茂は畦道で草を刈っている惣次郎を見つけた。惣次郎は農協の帽子をかぶり、草刈機を上手に使っていた。

惣次郎は地元の高校を優秀な成績で卒業し、地元の F 大学に進学し情報技術を学び、卒業後は東京の IT 企業に就職していた。理数系の秀才にありがちな人間関係は苦手といった感じは少しもなく、のんびりした人当たりの良い性格だった。

その性格が認められ、西川に戻ってきってから農協青年部に入り、茂たちと一緒に地域の農業を引っ張っていた。特に、IT 技術の知識を活用し、三年前に農協が始めた IT を活用した圃場別営農情報管理と業務用のネット販売、SNS を活用した准組合員と都会の消費者向け農協応援団の

技術的なサポートをしていた。

惣次郎は二人を見かけると、オヤッという表情になり、こちらに向けて手を挙げた。

「茂さん、こんにちは、賢一さんも一緒ですか？ ちょうどよかった」

「ちょうどよかった？ なんだ、惣次郎？」

「この田んぼの稲、少し色が薄くないですか？ 追肥したほうがよいですかね？」

「そうだな、少し薄いな、田植えは何時した」

「ちょっとまってください」

と言って、ポケットにに入れてあった小型のタブレット端末をだし、

「田植えは5月23日、3月15日に堆肥を1,000kg、5月5日に有機質N 8%を60kg/10a 入れてあります」

「堆肥が1,000kg、田植えが5月23日でN 8%が60kgか、田植えが少し遅かったから、追肥はいらないんじゃないか」

「そうですか、茂さんが言うなら間違いはないですね」

「俺に聞くより惣右衛門さんに聞けよ」

「親父にですか、親父はITなんてからっきしですからね」

惣次郎はにこやかに笑い賢一に話かけた。

「ところで、賢一さん、今度、農協の青年部に入るんですってね」

賢一はちらと惣次郎をみたが、少し後ろめたさがある自分を感じていた。

惣次郎は賢一の心の動きには全く気が付かずに、

「賢一さん、賢一さんの法人での経験、青年部の皆に教えてやってください」

と元気に言った。

「俺の経験？ ライスランド名島を潰した経験か？」

賢一は自嘲気味に言った。

「それも含めていろんなことです。今の青年部や農協の連中に賢一さんのビジネス経験を植え付けてください。青年部や農協の若手職員はそれを期待しているんです」

惣次郎は若者らしく答えた。

「茂、お前、わざと惣右衛門さんの息子に合わせたな？」

「そんなことはないよ。でもな、惣次郎の言っていた事は本当だ。今の「あらふね」のコメは、お前の経験と助言が必要なんだ。大手企業は、上手いことを言って「あらふね」の農業法人に共同出資し、最初はそれなりの価格でコメや果物を買っていたが、ここにきて価格を下げ、買い叩き、売らないといったら出資金を引き上げるか、法人を買い取るかのどちらかだ。このままいったら、「あらふね」は農地はバラバラ、組合員の気持ちもバラバラ、地域が崩壊する」

茂の話は宮島が言っていた話の「あらふね」版だった。大手企業は傘下の農業法人に対して締め付けと淘汰を始めていたのだ。

「そうだな、大手はやり方が汚い。俺もP県でやつらのやり方をこの目で見た。市場主義、競争メカニズムだけでは日本の食料と地域は守れない。俺も、これから、茂や惣次郎たちと一緒に地域の農業と農村を身体を張って守っていくよ」

「そうだな、一緒にやっていこう」

茂はしっかり前を向き、両手でハンドルを握りながら、

「実はな、賢一。今日の役員会でお前の青年部への入部と副部長就任を根回しし、専務たちの反対意見を潰したのは、営農部長の功と次長の昌二なんだ」

「……………」

「今回の俺の青年部への推薦は、お前の他に功と昌二も絡んでいたのか？」

——農協にたてついていた俺をな。これじゃ、やり直さなきゃ、やつ

らにすまん。

賢一は茂に聞こえないように呟き、ただ、青々と育っている田んぼを無言のままジット見つめていた。賢一の目には薄すらと涙が浮かんでいた。

「……………」

「賢一！ 何、ぶつぶつ言ってんだよ、お前、功、昌二、それと「あらふね」の稲がなければ、俺は、今、ここにはいなかったのさ」

茂の声が聞こえた。

おわり